
夢想月下 ~桜霧空~

川岸糸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢想月下～桜霧空～

【Zコード】

Z7192F

【作者名】

川岸糞

【あらすじ】

バルト森林帯に住む魔法使い月下八鹿と一応記憶喪失の霧島烽火、そして満開寺に住む自称陰陽師の崩咲恋。あらゆるもののが息づく世界夢想月下になにやらおかしな出来事を起こりつつあった。

序章・ンラガアオイツコウ（前書き）

修正上げました。

「迷惑をおかけしました。

序章・ソラガアオイコウ

空が輝くのは、空が喜んでいるからだと思っていた。

空が暗くなるのは、空の気持ちが暗いからだと思っていた。

空が涙を流すのは、空が悲しいからだと思っていた。

そして、わたしが涙を流すのは決まって悲しいときだけだった。

昔、一つの家族があった。

姉や妹、そして母親に囲まれた楽しい生活がそこにはあった。毎日楽しいことばかりというわけではなかったけど、その日々は今思えば楽しい思い出と言えるもので、輝かしいものであることに違いは無く、わたしは空と同じように喜んでいた。

日々が繰り返すのは、新しい明日に希望をはせる為了だと思っていた。

でも、違った。

空が青いのは、わたしの顔が恐怖で青ざめるから。

空が赤いのは、わたしの体が傷だらけだから。

空が暗いのは、わたしの明日が絶望の色に染め上げられているか

世界が日々を繰り返すのはわたしたちに絶望を植えつけるためだけだと知ったのはいつだったのか、もう思い出せないほどになつたけどその時思ったことは今でも覚えている。

助けてほしい。

夢であつて欲しい。

「めんなさい、『めんなさい』、『めんなさい』。

許してください。

わたしは空を見たいと思わなくなつた。空を見ても誰もわたしを助け出してくれない。

わたしは独房の中にいる、空という大きな独房の下にいる。

消えてしまえばいいのに、空なんて消えてしまえばいいのに、消えてなくなってしまえばいいのに。

何度思つた、姉さまたちはそれをしてはいけないとわたしに言つてくれた。

でも、もうわたしはやうなくちやいけない。

姉さまたちがいなくなつて過ごして来れた時間に絶望以外の色が見え始めたのはここ最近だけ、もうそれを長々と楽しむような力もない。

子供だましのような行為でこれを「しまかせると困わない。

でも、わたしはやめないとおもこます。

時間が来てしまつから、空を見るとそれに耐えられなくなつてしまつから。

準備を始めます。

あの子にわたしどと回り世界が広がらないことを切に願つて

わたしはそれを起します。

姉さま、お母様、「メンナンサイ。

ソラガアオイリコウは今でもわからないままだった。

0-1話・森の中の魔法使い

妖怪、妖精、その他諸々が息づく世界がある。それはどこにあるのかも知られていなければ、どこにでもあるとされる不思議な世界。忘れ去られた夢のような世界はその大きさは小さいながらも、あらゆる事情を含み、一つの秩序のように存在している。

世界名称は夢想月下。夢想の元、月の照らす世界であることからこの名前がつけられている。そしてその夢想月下に存在するバルト森林帯の湖には小屋がある。

埃っぽい空気が朝の訪れを感じさせるのは毎度毎度のよつに慣れた習慣の一部であり、それそのものに対しても意見を吐いていた昔は既に過ぎ去った。

月に暮らし始めて10年かそこいら経り、毎日が樂しことこうわけではないにせよ、あたしはそれがとても普通のことだと理解しているし、今の生活に不満を感じたことも一度も無い。

月の小さな田舎のベッドで田覚めるのもやつだし、起きた際に髪をくしゃくしゃと搔くことも、まぶしい太陽も全部が今の生活を作り上げてくれる一つの要素だから、不満を感じる理由にもならないのだ。

「ふわああああああ～」

思わず大きな欠伸をしてしまつ。昨日の実験を終えた時間を考えれば少しばかり寝たり無いと思ってしまつたりもするがそれはそれであり、今日は朝からやるべき「」とも多くあるので「」で起きておくことにする。

まず起きてから見るのは大きな鏡、自分の姿を全部見ることの出来るその鏡の前に立つて直ぐに寝間着を脱ぐ、未発達の胸については今後膨らんでいく予定なので心配はしていないし、それ以外を取ればすらりとした体躯があるので、それなりの自信を持てる。

ドロワーズ一丁だけになつてから近くの箪笥の中を漁り、いつも着ている黒いローブとスカートを取り出し着替える。何度も着ていることもありその体にフィットする感じはあたしのお気に入りであることを証明する感触であり、一日の始まりを感じられる唯一の瞬間でもある。

着替えを終えると今度は櫛で髪を梳く、あたしはこの金色の髪を梳くことも好きだ。それに髪の毛は女の命って言われてるくらいだし、正直な所あたしにとっても同じようなものだ。

十分に梳いてから再び鏡の前に立ち一回転する。

ふわりと浮かぶスカートから見えるのはドロワーズなので恥ずかしくは無い、正直あいつに指摘されるまでは下着のままで飛んでいたのでその点はあいつに感謝している。

なにせ、あいつはあたしの使用人なのだ。

「それじゃ、行くぜ」

その言葉と共に自室を後にすると、そのまま廊下とも言えない通路を抜けてリビングに出る。

あまり綺麗とも言えないそのリビングで、そいつはのんびりと机の上に置かれたビーカーやフラスコといったものを眺めては手に持ったノートにすらすらとペンを走らせてくる。

少しばかり近づいてみると一向に近づく気配もないのに、そのまま両手を手で塞いでやる。

「誰だかわかるかい？」

「八鹿、監察しておけって言つたのはお前だろ？」

悩んだ様子も無くそう話しかけてきたのはあたしの使用人ということである男で、名前を霧島烽火きりしまほっぷかといつ。

見慣れない服に身を包んだ顔に傷のある男である。

「一応、言われたとおり観察はしどいたが、ふわあああああー、やっぱり眠い」

ノートを手渡すや否や大げさに欠伸をかますのはよろしくないが、昨日の夜から朝に掛けてまでの間ずっと観察してくれていたこともあるので今回は許そう。

そのまま椅子に腰掛けてそのノートを流し読みする。

マジックアイテムの合成実験を行つたのではあるが、これでは元々の効力以下のものになつてしまつようで使い物になりそうもない。

手渡された結果を眺める限りでは今回の実験は大失敗に終わったようである。

「うへん、まいったぜ」

「どんどん、下がる一方だつたから失敗だろ」

「ああ、失敗だ」

結構時間を掛けて手に入れたアイテムが減ってしまったのは残念だが、今後も研究は続けていくので諦めるつもりは無い。それよりも朝飯が優先だ。

今にも机に突っ伏して眠ろうとしている使用人を叩き起こして、朝飯をオーダー、それに従うように眠そうな顔で台所に立つのを見ながら、外の世界に目を向ける。

太陽が照らしてくれる外の世界は希望に満ち溢れているかのようになたしのことを手招きしているように見えるし、なたし自身も外に飛び出したいとウズウズしている。今日が希望の明日を運ぶためにあるのだから、今田といつ田を命一杯楽しんで、明日に備えたい。

今日は今日しかないから、今日楽しめるなら今田中に楽しんでしまおうといつのがなたしのモットーだからだ。

出来上がった朝食の匂いになたしは考えるのをやめてそれにかぶりついた。

今日も一日、いい日になりそつだと、月下八鹿つきしたかづかは笑みを浮かべる

の
だ
つ
た。

安定した食生活を提供するのは使用人の勤めだと教わったのは一ヶ月前になるが、その前から適度な食事というものを提供していた使用人、霧島烽火は今日も朝飯を作ると共に申し訳ない程度に作られた梯子から屋根へと登り、その上で寝息を立てていた。

自分自身の出生についても、どこから来たのかも理解していないこの男は、ある意味で記憶喪失と呼ばれる部類に入るのであるがそれを理解していない。

なにせ記憶喪失というものを証明するには、その人物を知っている者がいなければいけないからである。記憶喪失の人間はその知っている人間の、知っている自分像を聞かされることにより初めて記憶喪失であることを理解するからである。

しかし、そんなことを気にすることも無く、ただ今だけがあれば良いと考える今を生きる主義者なので当然であった。

すでにお天道様は空の真上で止まり、森の中からは野生動物の鳴き声が聞こえ、近くにある湖からは水の流れる音が聞こえてくる。

これほど眠るのに最適な場所は他には無いと言えるので、烽火は一人思う存分昼寝を楽しむわけであるが、それも長くは続かないのが世界の断りである。

屋根に上ってきた影、それは黒い大きな丸帽子を被つた魔法使いでその口元を妙に吊り上げていた。

そして、手に持つたホウキで烽火を掃き始め、そのまま屋根の縁まで誘導し、そこで声を掛ける。

「烽火、起きろ！」

いい音を立てて地面に落ちる烽火と、それを見下ろしながら大爆笑をする八鹿。

地面に落ちる寸前に受身を取つたこともあり、烽火は受身を取つた際にぶつけてしまつた部分を摩りながらのんびりと立ち上がる。毎度毎度このようになつてるのでそろそろ眠る場所を変えようかとも考え始めるべきである。

屋根から飛び降りてきた八鹿は見事に着地し、痛みに顔を歪めている烽火に一言、「修行が足りないぜ」と呴いてからホウキを壁に掛ける。

目の前にいる魔女っ子を見ながら覚めた意識で口を開いた。

「それで、なんで俺は落とされなくちゃならなかつたんだ？」

「寝てるからに決まってるだろ」

「お前の実験結果を観察するために起きていたのになんていう仕打ちなんだ。お前起きてるよ、俺寝てないんだぞ！」

昨日の夜から朝に掛けてノートにアイテムの変化状況を記載する

だけでも大仕事だというのに、寝かせてもくれないなんて何たる地獄か、出来る限りの睡眠と休みを提供するのが主の仕事だと考へて、いる烽火はストレートな意見を返すが、ハ鹿のほうはその意見に耳を貸す気も無いようで口笛なんか吹いている。

「まあいいや、それよりもそろそろ行くぜ」

「ああそういうかい、お前一人で行つてくれよ。俺寝たいし」

「そういうわけにもいかないさ、あいつの愚痴話に付き合わされるあたしにも身にもなれ、烽火が付いてくればその威力が五分五分になるんだからよ」

結局、使用人というのは弾除けや、身の回りの世話くらいのことしか使われない存在なのだと理解し、同時に全然休めなかつたことを悔やみつつ、従うしかないのであろうとの空氣に押されるよう、小屋へと戻る。

一応、バルト森林帯は人を襲つ妖怪や妖精が多く生息している場所でもあるので、出来る限りの装備で臨む必要があるのである。

居間を素通りし、八鹿の部屋の前にある部屋に入る。部屋の中は充满する鉄と火薬の臭いで満ちており、その手の臭いに慣れていない人間が入つたらくらくらすることがマジが得ないほどである。

その臭いの元を発見し、烽火はタオルでそれを拭う。

それらは銃器と呼ばれる武器。

小型のものから、大型のものまで合計で二十種類ほどあるが、そ

れら全てが本物であることは言つまでもない。

これらの銃器全てが烽火の所有物であり、その利用方法など理解しているの烽火だけであるので彼以外にこれを使える人間はない。教えることで使用できるようになるだろうが、そんなことをする気は烽火に無い。

「え、と、人里を通過するんだから小さい奴のほうがいいか」

小さい物の方が持ち運びに便利であることからそういうものをチョイスする。

手に収まる程度の大きさのその銃を選び取るとそれに見合ったホルスターと共にベルトに装着し、部屋から出るなり外へと急ぐ。

ハ鹿が気の短い人間であることを理解しているので急ぐ必要があったからだ。

「置いてくぞ」

案の定、ハ鹿は少しばかり空を浮き始めていた。ふわふわと浮いているのは魔法の力を駆使したホウキ、グングニラに乗っているためあり、彼女の意のままに動くグングニラは段々と高度を上げていく。

それに間に合わせるように、梯子を駆け上がり屋根からダッシュして飛び出し、ハ鹿のホウキに飛び乗る。

思つた以上にぐらぐらと揺れるホウキにしがみ付きながら收まるのを待つ。ハ鹿もまたホウキの揺れが收まるのを待ち、やがて收ま

つたところで烽火を睨む。

「落ちたら危ないだろー。」

「だつたら用意が終わるまで待つてればいいだろがー。」

「あたしは一分一秒を無駄にしたくないだけだよ」

「何が一分一秒だ、その言葉はお前が言つても説得力無いんだよ」

少しばかりの言い合いを終えた頃になつてホウキは湖の上をのんびりと飛行していた。

感じる風はとてもさわやかで、春が終わりを迎えて夏が来る」とを感じさせる夏風であつた。

バルト森林帯を見下ろせば、数多くの妖精たちが花の周りに集まつて談笑している姿も見られ、目が合つて手を振るといった行動を烽火は繰り返す。

「烽火つて友人多いな」

「妖精たちと仲良くなっちゃいけないなんていう決まりは無いしな。それにハ鹿も妖怪の友人だつているだろ」

「へつ、それもそうだな」

「今日来るんだろ。なんか面白いもの見つけたから見せてやるとか言ってたな。生意氣だけど」

「くつくつく、烽火は子供っぽいからな、丁度いい遊び相手なんだ
「みづ」

八鹿の言葉に溜息を漏らしながら、それも別にかまわないといった感じで顔を上げる。

ホウキは速度を上げて森林帯を進み続け、やがて人里へとたどり着くのであった。

人里には人が住んでいる。それは当たり前のことでありながら、とてもすごいことであると誰かが言っていた。

この夢想月下に置いて人間は食べられる生物である。

妖精よりは強いかもしけないが、大の大人でも妖精以外の人ならざる者たちになどに勝てるわけは無いため、捕食対象として見られることは必然的である。

そんな人間達が群れを成して住んでいる人里は周りを完全に見晴らしの良い草原や野原ばかりで、いつでもその手のものの襲撃に備えられるような場所になっている。人は弱いが、力を合わせれば強いということを証明するような風景であった。

「はあ～、今月はこれだけでやりくりしないといけないのか

そんな里から離れた場所にある小さな骨董屋で愚痴を零す一人の少女がいた。

赤い服、清め着とも呼ばれている服に身を包んだ黒の長髪、そして目の前にある財布にはまったくといっていいほど金が入っていないかった。これで、ある場所の陰陽師（自称）をやっているのであるから驚きである。

彼女の名は崩咲恋くずれさきれん、この夢想月下では珍しい陰陽師（自称、誰が見ても巫女）であり、近くにある寺で日々の疲れを癒そうと奮闘している。

そんな彼女が今悩んでいるのがお金の問題である。

あらゆる世界、それは遠い遠い宇宙の彼方であるつと、過去の世界であるつと、未来の世界であるつと、ぴちぴちお姉さんと一つ屋根の下で暮らしていくと、この夢想月下であろうともその価値は全てに共通である。それは人間という種族が作った物々交換を終えるための考えであると同時に、人々を魅了する魔物の正体でもある。

こんな年端もない少女がそれに悩んでいる理由は彼女が一人で暮らしているという理由があるからである。

「まあまあ、これでも飲んで落ち着け、大丈夫だお茶ぐらい無料で飲ませる」

そう言ってお茶を差し出すこの骨董屋の店主」と、そうぎけんねいざん 豊財權靈山は

苦笑していた。

白い髪の好青年に見えるが実際はいい兄貴といった感じの人物である。この骨董屋【提燈】ぢとうを営業している社会人と言った方が正確なところである。

「ありがとう、まったく寺がある理由つてのを理解して欲しいわ」

「いやいや、あの寺までわざわざお賽銭を入れようなんて物好きは中々いないよ。なにせ、道中で妖怪や妖精に食い殺されてしまうかもしぬないからね」

「毎日通つてるけどそんなこと無いわよ」

しらうとした態度でそう付け足す恋、それはあんたが一応陰陽師であるからだと言つたくなる靈山であるが、ここに言つたところで何の解決にならないので黙り話に耳を傾ける。

「それより、この前頼まれた品が見つかったよ」

「えっ、ほんと。お金は前払いしたわよね？」

「ああ、もう貰つてるから大丈夫だ。ちょっと待つてくれ

その言葉を残し店の奥に姿を消した靈山は、やがて小さな箱を片手に現れてそれを恋に差し出した。

良くわからないその箱にはP & Sという模様が描かれており、何かを入れるための穴とその何かがセットになって付いていた。あとはWの形をした十字のボタンと三角やら四角のボタンが付いたものもセットである。

「何気に腰が折れたよ。これを買いたがるお客というのも珍しいくらいだからね。どうやって使うかもわからないものなんだがな」

「大丈夫、これの使い方を知つている奴を一人知つてゐるから、だか

らわざわざあの四角いですぶれい？だけ、を買つたり、円盤状のきらきら光るものを持ちたんだから、なんでも長時間の暇つぶしが出来るものらしいしわ」

これで暇つぶしが出来るわ～と、期待に胸を躍らせている恋、それを見ながら靈山は微笑みの笑みを浮かべて、

「やうかい、それは別にかまわないが返却は受け付けないからね」

さすがは店の店主をしているだけあってアフターケアもしっかりとしているようである。この店のリピーターがおかしい人間だけなのはそれが理由なのかもしれない。

そうこうしている内に時間というものは経過するものであり、すでに日は真上に上がりそろそろお昼といった時間になる。

提燈の店内には恋以外の客は来ず、静かな時間が過ぎ続ける。

恋はつまらなそうに店内を見回し、靈山は読書に勤しむことだけを続ける。もう三杯目のお茶を飲み干してしまったし、今さつき受け取った箱は綺麗に包みに入り、今か今かと恋の動きを待っている。しかしそのまま静かに流れるはずだった時間は突如として終わりを迎える。

「おや、お客様のようだ」

靈山の頭上にある鈴が小さく音を鳴らす。

口の提燈の入り口の前に何かが入ると鳴り響くようにしてある鈴

がその音を鳴らしたからだ。静かな音色は、暇をもてあましていた恋の耳にも聞こえその目線を自然と入り口のほうへと向けさせる。

静かに開いたドア、そこから顔を覗かせるのは一人の人間。

片方はホウキを片手に持つ魔女っ子、そしてもう一人は少しばかり疲れた顔の男である。

「お~っす！」

「おはようさん」

二人の挨拶が店内に入り込み、その言葉に一人はのんびりと挨拶を返した。

「おはよう辰下、それと烽火も」

ハ鹿はその言葉を聞くとすぐさま恋の方へと歩いていき、烽火は靈山の元へと足を進める。その足取りはどこかふらふらでまだ眠気が取れていながら見て取れる状態である。しかし、一応この三人の中でも一番真面目にこの店を利用しててくれる友人なのでそんなことは気にしない。

「おはよう、今日もいい天気だな」

「突拍子に何を言い出すんだ。まあ、確かに今日はいい天気だな、日光浴にはとても最適な日照りといえるよ」

「ああ、出来ればそうしていたかつたんだ」

「落とされたのか」

その言葉に何度も頷き、カウンターに突っ伏す。昨日の夜も眠つていないうることもあり、さすがに眠気も最高潮に達していた。直ぐにでも寝たい気分なのだが、さすがに店の中で寝るわけにもいかないわけで、こう我慢しているわけである。

「まあいい、景気はどうだ？」

「ぼちぼちって所だ。いろいろ売つて生計を立てるのにも慣れだし、銃弾の精製もうまく出来るようになつた」

「そうか、あの銃つていう奴だけはどうにしても手に入らないんだな。火薬とかを売るので精一杯だ」

「なあに、火薬が手に入るのと入らないのとはまったく状況が違う。火薬が手に入るだけでも十分助かっている」

「他にも包帯とかも良く買つていくけど何でだ？」

その言葉に烽火は口を止める。その理由がハ鹿の魔法攻撃実験の標的になっているからなどと言える訳が無いからだ。それはなんというか男のプライドとかそのいつのがあるのだ。

初めて店を訪れたときから妙に親近感を覚えあつた二人は今現在のような親友的関係を築くまでのそれほどの時間を掛けていないし、仲がよくなつた後はよく買い物をしに来るくらいで、常連と呼ばれる位置にまで達している。

「実験の怪我が多いんだ」

「そりが、気をつけろよ（ビーフセ、標的にでもおれてるんだ）」

「本人にはすでにばれているのだが、そんなことを知る良しもない烽火は内心安心しつつ、視線をハ鹿と恋の方へと向ける。

一人は小さな椅子に座りながらのんびりと話をしているようである。その内容は実際、この頃お賽銭が全然入らないから食べ物がーとか、だつたら育ててみれば、無論あたしも手伝うぜ、おもしろそうーとかいう話であることは伏せておこう。

そこでこちらが一人を見ていることに気が付いたらしく恋が歩み寄ってくる。毎度毎度思うのだが、この露出度の高い格好はなんかの宣伝なのだろうかと、思案してみるもいつも通りの恋は強気な顔を崩すことなく烽火の前に立ち口を開く。

「それじゃ、そろそろ行きましょ！」

「ああ、そうだな。満開寺にいくんだろ？」

「おお、そうだつたな！」

椅子に座つてのんびりしていたハ鹿もじきに歩み寄り、恋の肩に手を置いて早く行こうと急かす。

その光景を眺めながら無邪気な笑みを零している靈山に別れ告げて、提燈を後にする。

空は雲ひとつ無い青空、これから過ごすことになるのんびりとした時間がとても有意義になることを予見しているように、恋は一人

地面を蹴り空へと上がる。

恋は空を飛べる人間だ。それもそれは彼女自身の力ともいえるし、それが自称陰陽師と呼ばれるだけの才能を持つ彼女にはとても似合っている。

しかし、下着が見えてしまつようという心配をしていないのか、恋は中が見えないぎりぎりの位置で待機し一人を見下ろして、行くわよと一言呟き先に飛んでいく。

その言葉に従うように八鹿はすぐさまホウキに跨り、烽火もすぐさま飛び乗る。同時に二人は空高く上がり、そのまま恋の後を追いかける。

夏が迫っている妙に過ごしやすい風を切りながら三人はその寺を目指す。

三人が去った後、靈山は外の空気を吸いに外に出た。

しばらくのんびりしていたこともあり、太陽の光を浴びると自然に欠伸が出てしまう。

「ん？」

そこで靈山の前を一枚の花びらが目の前を通り過ぎる。それは淡いピンク色の花で、落ちたそれを拾つて靈山は珍しいものを見つけて、記念に押し花にするために本の間に挟むのであった。

〇三話・満開寺に舞つ花びら

人里から離れた場所に一つの寺がある。

かなり昔に立てられたその寺は修繕作業などを行うこともなかつたが、今でもその姿を変えることなく存在しているといわれる。

そのかわり参拝客に関してはほぼ皆無であり、賽銭箱には何も入っていない。時々、化け狸が葉っぱを入れていく程度のそんな場所である。

その境内内は正直な所、あまり神様を祭る場所とは異なつた空間に変化している。

夏なのに炬燵が完備され、みかんとお茶、きゅうすに薬缶などが陳列され、何本もの黒い配線が溢れコタツの方角から見えるようになかディスプレイと呼ばれる機械がその姿を神々しく見せていた。

その真下で作業をしている烽火は、一度傾いてからコタツに倒れるようにして待機している一人に声を掛けた。

「よし、これでOKだ」

一番に近づいてきたのは恋である。その顔は期待に満ち溢れ、すぐさまそのボタンを押してやううと意気込んでいるようである。

ハ鹿はその様子をのんびりした顔で眺めつつ、ビック退屈やうとしている。

二人はトントン拍子に作業を進め、今日手に入れた箱のようなものに配線を繋いでディスプレイにも残った配線を繋ぎ、電源用の配線を四角い箱に無理やりな形で繋いだ。

準備は整つた。

一人が息を飲みながらそのものに向かつて手を伸ばし押した。

ざわざわするような音が聞こえたと同時にディスプレイの黒が少しばかり明るい黒を放ち始める。

どうやら成功のようである。

息を飲み込み、成功をかみ締める二人は最終関門へとその手を伸ばす。それは黒い箱でP & Sという文様が付いたもの、中には円形状のきらきら光るものもセットした。もしもの時を考えて他の物は全部大切に保管してある。

準備が整つたことを確認して烽火が頷き、恋が肯定の頷きを返した。

もう恐れるものなど何も無い、勢いよく烽火はそのスイッチを押す。

「スイッチON!—!—」

閃光が走つた。まぶしい閃光で、それは一番離れていたはずのハ鹿にも届き、それが何を意味するのかを理解することなく、閃光はやがて炎をへと姿を変え、最後には大きな爆発音と煙を三人に拭き

掛けた。

境内に広がるのは黒い煙で、全ての扉を開けたところで何も変わらない現状の中、三人は何が起きたのかを理解することに専念していた。

烽火の話ではこれはゲーム機と呼ばれる機械らしい、なんでもこの箱を一台とそのきらきら光る円盤状の物、ディスクと電源装置、そしてそれを映し出すディスプレイと呼ばれるものがあれば作動し、暇な時間を潰す事の出来る画期的なものらしい。

その箱は今黒い煙をモクモクと上げながら完全に機能停止状態で待機している。ああ、お金の無駄になってしまったと思いながらも恋は一番被害にあつたと思われる烽火の元へと歩み寄る。

真正面から煙を浴びたようで咳き込み続ける音が聞こえてくる。あの量の煙を吸い込んでしまったとなればそれも仕方ないだろう。

「けほつ、けほつ。おかしいな、失敗するはずねえのに」

「ちょっと大丈夫？」

振り返った烽火の顔は黒く汚れており、同時に考え込んでいる表情であるから妙に気色が悪かった。

煙が襲い掛かってくる直前にコタツの影に隠れたハ鹿だけが汚れも無く一人の状況をのんびりと歩み寄ってくる。その顔はあきれた表情をしていて、こんなことを続けていてこの寺は将来も残つていいのだろうかと不安になるものであった。

「おいおい、一人して何してんだよ」

「ハ鹿、タオル持ってきて。それと烽火は境内の掃除よろしく」

『うへえ～』

「はいはい、早くする」

その言葉に従うようにハ鹿はタオルを取りに境内を出て、烽火は壊れてしまつた箱からディスクを取り出して、あの爆発の中その無事な姿に感心しながらそれを手渡す。

それを受け取つた恋はお金を出してまで手に入れたその箱が無駄になつてしまつたことを落胆した顔で確認してから、のんびりとした足取りで境内から出る。

丁度横をハ鹿がタオルを持って通り過ぎ、すぐさま烽火に手渡す。

汚れた顔をタオルで拭いた烽火は、何で失敗してしまつたのかを考えながら、その黒い煙を上げ終えたゲーム機を眺めた。見た目的に問題はないのだが、さすがに靈山の店で売っていたものだから仕方が無いと妙な納得をしてその箱を手に外へと出て縁側に放置する。

おしゃかになつてしまつた箱を眺めながら、何が失敗だったのかを考えてみるが、一体何が失敗の原因なのかは考え付かない。

「バッテリーを業務用のに下のが間違えだつたのか？」

「業務用つて何よ、もしかしてバッテリーが違つたから爆発したわけ？」

隣で溜息を吐いている恋は、そのおしゃかになつた箱を同じよう
に眺めながら聞いてきた。すでにお釈迦となつた箱は黙つたまま一
人の視線を浴び続けている。

「わからんけど、今度は俺が試してみることにするわ

「当たり前でしきうが、それより掃除してきてよ。境内を汚した罰
として」

「どっちかっていうと生活スペースだろ?」

「そうかもね、早く片付けておいてよ。三人で昼食を食べるんだか
らさ」

それだけ言って恋は寺の裏にある民家へと行くことのできる渡り
廊下へと向かう。満開寺は寺のような本館と住居用スペースの裏館
に別れており、普段は裏館で生活をするものだが、烽火の「誰
も来ない寺なんだから、境内で堂々と飯を食つのもいいんじゃない
か」という言葉により、現在は生活の中心は境内に移っていた。こ
の一ヶ月でこの寺の環境は恐ろしいほど変化し、参拝客はもつと減
つていった。

そもそも、ここに参拝しに来る客を見たことが無いというのが烽
火の感想であり、八鹿のはなしを聞く限りでは年の始まりでさえ、
ここは静からしく、いつも恋と八鹿と靈山の三人で年を明かしてい
るらしい。

今年は俺も参加するから四人だなー、なんて思いながら空を見上
げると、何かが目の前を通過した。

それが何であるかを調べるために下を見ると、そこにはピンク色の花びらが一枚落ちていて、それがとても珍しいものであることに烽火は首をかしげた。

「おーい烽火。掃除を手伝ってくれよ」

境内の中から聞こえてくるハ鹿に言葉を返して境内に戻る。花びらは再び吹いた風に煽られてどこかに飛んでいった。

境内の中から見える入り口の桜はすでに枯れ、桜の花びらなどどこにもつていなかつた。

04話・夏の訪れ

日は傾き、空が赤色に染まる時間。人里は夕食の準備をしている家庭で溢れ、家路を急ぐ人間の姿が多く見られる。世界は夜へとその時間を移動させつつある。満開寺も例外とは言えず裏館では現在夕食の準備を進めている恋の姿があり、ハ鹿は人里へと買出しに岡かけている。

そして唯一の暇人たる霧島烽火は、本来満開寺に着く為に登らなければならぬ石段の一一番上に座りながらのんびりとしていた。

つい先ほどまで続けていた境内の清掃作業が終わり、その疲れを癒すように胸ポケットに入っている煙草を口に咥えて火を点け、吸い込んだ後に吐き出す。

煙草独特の香りと煙が立ち込めるのを肉眼と嗅覚で感じながら、夕暮れに染まる人里と山を眺める。

ここから眺めることの出来る光景はとても綺麗なもので、満開寺に来たときはいつもこの光景を見ることを日課にしている。今日一日が無事に終わることを感じさせるための光景でもあった。

「ふう、記憶ね」

だから、こんな光景を見ると性もなく考えてしまうのだ。土砂崩れに巻き込まれていたところを助けられたという自分、そして記憶喪失だと言わされている理由、いつもなら気にすることも無いそういうことが、一人で夕日を眺めているだけで考えさせられてしまう。

多分、夕日が無性に孤独に見えてしまつからそういうことを考えたくなるのだろうと思えば納得できる。自己満足と言われてもいいと、烽火はそこで考え方やめた。

いざれわかることはそのときになつて知ればいいだけだし、無理に知りうとしてもいいことなど何も無いのだ。

氣づけば煙草は短くなり、携帯灰皿に吸い終えた煙草を揉み消すに突っ込み、再び新しい煙草に火を点ける。

別に煙草がいつも必要な依存症患者と言うわけではないが、こういつ気分のときは吸つてみたい気持ちになる。

もう一度煙を噴出す。空に漂つた煙は少しの間だけその姿を見せ、やがて霧のようにその姿を消していく。

ぼんやりとしたまま赤く染まる世界を眺めていると、

「境内の掃除」苦勞様

聞き覚えのある声が耳に入り、その人物が隣に腰掛けた。

自称陰陽師の少女、崩咲恋は手に湯飲みを入れた箱ときゅうすを持つており、のんびりとした手つきでお茶を用意する。

湯飲みにお茶が入り込む音が聞こえ、静かだつた世界に音が混じりこむ。聞いているだけで心地よい気分になれるその音を聞きながら再び煙草を吸い込む。

「はい、お茶」

「ありがとさん」

湯飲みを受け取りながら、吸っていた煙草を携帯灰皿に置く。まだ吸える部分も多く残っているし、なにより恋は煙草を吸いながらお茶を飲むという行為を許さない人物であるが故の行動だった。

湯飲みを傾けのんびりとお茶を啜る。苦いがそれがおいしいと言われるだけあり、そのお茶は本当に苦かつた。

「苦い…………」

「ふふふ、お茶なんてそんなものよ。それに烽火はお子さまだから、大人の味つて物がわからないのかかもしれないわね」

そう言いながらお茶を啜る恋は、その味を楽しむかのように嬉しそうな笑みを浮かべている。一ヶ月前、桜の木の下、四人で行った花見を思い出す。桜が咲き乱れ、風が吹いて飛ばされた桜の花びらがお酒の入ったコップに入った時は無性にうれしかった。それが子供っぽい理由の一つなのかもしれないが、烽火はそういうくだらないことが好きだった。

「もう一ヶ月になるのね」

「ああ、俺があんたら三人と出会つてな」

「」の頃、八鹿の調子はどうなの。あいつ、いつも平氣そつとしてるから氣になっちゃつてさ」

そう言つてくる顔は少し笑つてゐるが、恋がハ鹿のことを心から心配をしていいるのを理解している烽火は、いつも通りでなんら変わりは無いと伝える。

その言葉に、また同じこと言つてるわよ、とまた嬉しそうに顔を緩める。寺の鳥居から眺められるこの美しい光景を、こうして二人並んでみるのも悪くないと烽火は思つ。

隣に誰かがいてくれるといふことがどれほど安心できるもののかをなぜか知つてゐるから、そう思えてしまつ。

次第に夕日が沈み始め、瞬く間に夜へと変化し始めるのを眺める。隣に座る恋もまたその光景を眺めてお茶を啜る。

「お~い」

そこで声がした。ハ鹿でも恋でもない少女の声、どこか気の抜けた感じのするその声の主を見つけるために空を見上げるとそこには一人の羽を纏つた少女が浮かんでいた。

一人が自分に気がついたようで嬉しいのか、その少女は一直線に烽火の胸へと飛び込んでいき、壮絶なタツクルを喰らわす。

「うつ！」

突拍子も無い行動に反応することが出来ず、烽火は腹にぶつかつて来た少女をつめたい田で眺めながら、痛みを抑えて横に置いた。

「な、なにをするんだチコ」

「何つて烽火への挨拶だよ。恋々、遊びに来たよ～」

その言葉だけを残して恋の膝の上に座り込むチコ。

チコは妖怪である。その背中に生えているのは蝶の羽であることから蝶の妖怪らしい、苗字は無く蝶の妖怪チコというのが正しい言い方といえる。綺麗な黒と黄色の線が入ったワンピースを着ているその姿は年相応の少女にしか見えない。

恋の膝の上に乗りながらチコは今日したことをうれしそうに話している。

「それでね、今日は花を見つけてたんだ。こんな大きいのー。」

手でその大きさを表現する仕草は可愛らしいもので、恋はその行動を見ながらちゃんとチコの話に耳を傾けている。

その隣に座る烽火は今でも続く腹への痛みを少しばかり感じながら、再び煙草を口に咥えて吸い始める。どうにもこつにもチコは烽火の御腹に突撃することをやめないので、半ば諦めている状態なのである。

また静かに流れ始める時間に身を置きながら、隣ではしゃいでいる一人の会話に耳を傾けつつも、煙草を吸い続ける烽火。

それは傍から見ればまるで……

「夫婦みたいだぜ」

「は？」

いつの間にか買い物を終えて帰ってきた八鹿がホウキに跨りながら空に浮いていた。ホウキの先っぽには食材の入ったバスケットが吊るされ、中に入っているであろう食材がその顔を少しばかり見せている。

「まつたく、あたしが買出しに行っている間に子供なんて作りやがつて」

「はいはい、そんなのどうでもいいからちゃんと買ってきましたんでしょうね。それと無駄なものを買ってたりとか無いでしょうね」

「うわっ、あたしの台詞スルーですか、まあ別にかまないけど」

地面に降り立つた八鹿はそのバスケットを恋に渡してから、チコを確認して挨拶をし、チコもまた嬉しそうに挨拶を返す。

八鹿の友人であるチコは四人組の面識がある人物であり、その人懐っこい性格も相成つて直ぐに烽火とも仲がよくなつた。みんなからもいい目で見られるチコは嬉しそうな笑みを浮かべて八鹿に質問する。

「チコって恋と烽火の子供なの？」

「なりたいか？」

「どっちかというとみんなの子供になりたい！」

「欲張りだなチコは、そういう所は好きだぜ」

「わたしもハ鹿大好きだよ～」

一緒にランランと回る一人、神社の敷地内には相応しくない空気を感じながらもそれに身を任せても悪くないと烽火は一人煙草を吸い続ける。なにか懐かしいと感じられるその空気はとても心地が良いからだ。

「さあさあ、早く準備を始めるわよ。今日は鍋、鍋なんだから!」

『おーー。』

恋はバスケットを片手に急ぐように境内へと向かい、それを追うようにしてハ鹿とチコも続き、一人残された烽火はのんびりと煙草を吸い終えてからのんびりと続いた。

その頃には日は完全に沈み、夜と呼ばれる時間が世界を支配する。この夢想月下もまたその夜が訪れる。全てを飲み込むようなその暗闇から逃れるためには光を求め、その光景がこの人里が明るく輝く光景であった。

それを望みながら食べる鍋は格段においしいと云うことで、境内の入り口近くに炬燵を移動させて鍋を囲む四人はどこか楽しそうに箸を揺らす。

「よつと、久しづりだぜ鍋を食べるなんてよ」

お椀に具材をよそいながら久しづりの鍋を楽しむハ鹿、帽子は近くに置いて急ぐようにどんどん口の中へと具材を放り込んでいく。その速さはとても早く、のんびりと食事を者の具材を全て奪い去ってしまうかもしれない勢いである。

「まったくそうねー。」

それに負けず劣らずなのは陰陽師である。その袴の裾を完全に捲り上げて腋が見えるのもなんのその、具材をお椀によそつてはすぐさま口に放り込む。その速さ、まるで掃除機のようである。

「…………」

「…………」

そして、その光景を見ながら呆れている者と驚いている者一人は、そのお椀に一人分くらいよそわれた具材を食べることも無くそのフードファイトを観察する。鬼気迫る勢いとはまさにこのことで見ているこぢらに一人の気迫がありありと伝わってくるのが感じられる。

段々と鍋の中身がその姿を無くしていく中、呆れている方である烽火は思い出したように隣に座るチコに話しかける。

「そういうえば、チコ話したいことがあるって言つてたな？」

「二人ともすうじない、ん、そうだよ？」

「なんで最後が疑問系なのかはこの際聞かないが、何か面白いものを見つけたとか何とか、それで今日見せるとか言つていただろ」

「それはね～、これだよ」

そう言つてワンピースの中から出てきたのは花で出来たネックレスである。あの女の子とかがよく花畠で作る、正確にはブローチと

でも言つたほうがいいだろうか、そんなものが手渡される。

鍋の中身を未だに取り合の獣一匹の葛藤をバックミュージックに烽火はその花で出来たそれを眺めて首をかしげた。どこにも不思議なことも無いし、チコがよくこの手のものを作つて持つてくることがあるのでそんなに不思議に思つことも面白いことでもないのだ。

そんなこんなでチコを見ると、その顔はその花を見てくれというよつに動く。

改めてそれを作るために利用された花を見る。薄いピンク色の花びらで、それはどこからどう見ても桜としか言いよつが無かつた。

「いや、ちょっと見て」

だからこそ、烽火はそんな声を上げてしまった。

一ヶ月前にした花見から三週間もしないうちに桜は散つたことは覚えているし、なにより今は夏が迫り始める次期、桜が咲くという条件が整う場所が存在するわけがない、稀にそういう狂い咲きがあるかもしれないが、この花びらはそういう桜木で出来る桜の花びらとは少しばかり違う。

なにせ大きいからだ。大きさはバラの花びらと同じくらいで、この大きさから考えてもこれが桜の木だとするならばかなり巨大なものであることが予想できる。

「大きいな、これ」

「でしょう、一面に咲いてたんだ」

「一面に？」

「そう、いつも遊んでる大きな広場があるんだけどね。そこに一杯咲いてたんだよ」

その言葉で桜の印象は消え去った。花、桜の形をした花があるのか？

考え抜いた結果はこの答えであるが、自分が知っている限りそのような花は知らない、なら見てみたくなるのが人の良くというものがだ。

探究心という言葉をこれほどまでに活用するのは久しぶりのことと言えるから、その花びらでできたネットクレスをチコに返して烽火はお椀の中に入っている具材を口に運ぶ。

明日の予定は決まった、後は一杯食べて一杯寝て明日に備えるだけ、その前に片付けという面倒くさい仕事が待っているかもしれないが、明日の予定が決まったというだけで烽火は満足した。

夜、夜が迫る。

月夜がわたしの体を照らす。

妙に暖かい、暖かくて、とても心地の良い光。

「お嬢」

その言葉にわたしは額きを返すだけ、気配は直ぐに消える。

始まる、始まる。

わたしの戦いが、わたしがしなければならない戦いが。

夏が迫るのはわたしのためでも人のためでもない、世界が回るため。

だからわたしもわたしのためにあるべきことをしようとして、それがわたしのためになるのだから。

あの子のためになるはずだから……

朝が始まり、昼が始まり、夕方が始まり、夜が始まる。

それら全てが欠けることなく動くのが世界と呼ばれるものの秩序ある姿である。欠けることは許されないそれが世界がその姿を維持するために必要なことだからだ。

はて、誰にそんなことを教えられたのか、眞面目熱心にそんなことを教えてくれた誰かがいた気がしたことを感じながら霧島烽火は目を覚ます。

寝ぼけ眼をこすりながら開け始めた視界に広がるのは一面の花の海。大波のように横切る風が花を揺らし、それは瞬く間に迫り来る波のように動き、烽火を置いて向こう側へと去っていく。

ブルーシートの上、唯一花の咲いていなかつたスペースに陣取った場所、着いてからすぐに眠りに入った烽火は連れの姿を探すように見回す。

つと、目の前がいきなり暗くなる。

「だれーだ」

おかしな発音と共に聞こえてくる可愛らしい声に烽火は溜息を一つ漏らしてから、その日に掛かった手を解いて顔を後ろに向ける。

「えへへへへ、烽火やつと起きたんだ」

「チコ、お前は元氣すぎる。その元氣を少しふらい俺に分けてくれよ」

元氣な笑顔でぴょんぴょんと飛び跳ねているチコ、その手には昨日見せてもらった桜のネットクレスと同じものが握られていた。作つてまだ時間が経っていないのだろうか、その花が漂わせる独特的の香りがある。

そしてそのチコの後ろには花の海に腰を下ろして何かを作つている八鹿と恋の姿もあり、その二人がこの花の海に漂うよう難破船のように見えてしまつのがおかしかつた。

「あつれー、昔は良く作れたんだけどな。なんか、違うぞ。難しいぜー！」

「八鹿、それじゃ花がちぎれちゃうわよ。こほこほこほこほすれば……、あれ、なんか絡まつた」

二人してチコの作り上げたネットクレスに似たものを作ろうと必死になつてゐるようだが、如何せん花に触れるのが久しづりなようで、千切れてしまつたり無駄に絡まつてしまつたりと色々な苦労をしているようである。

烽火の首にネットクレスが通され、チコは嬉しそうに笑う。

「なんだ、くれるのか？」

「うん、烽火が行きたいって言つてくれたからみんなで来れたんだもん。そのお礼だよ！」

本当の笑顔というものはこういうものを言つんだろうなと思いつが
がら受け取ったネックレスを眺める。丹念に繋げられた桜の花びら
とそれを固定するためのツタが何十にも巻きついている、なのに首
に掛けたときにはそれの違和感が感じられなくて、とても掛け心
地のいいものであった。

「ありがとさん。それじゃ、俺もお返しの品を作らなきゃならぬ
えよな」

烽火も立ち上がり、制作に手を焼いている一人の横に座り込む。
チコにお礼の品をプレゼントするためだ。少しばかり手を鳴らして
から、二人と同じように用意された多くの花びらとツタを手に取り
作り始める。

男が花でネックレス制作などといつのはいさか異様な光景で、
隣に座る一人はその光景を面白そうに見ていたが、その顔はやがて
狂気なものへと変化した。

（これはなんだ？　あの花びらの束から出来るものなの、それに手
が早すぎる。こ、細かい！）

（あつれ）、あたしたちより早いしうまいし、高度だし、つてなに
これ、なんかその、なにか違うぜ）

烽火の手は恐ろしいほど早く動き、それは花のネックレスなどと
呼ばれるものではなく、本当の意味で高価なネックレスになり始め
ていた。何回と巻きつけられたツタに施される花びらの飾りつけ、
その上に再びツタを巻きつけると、それを花びらで上から慣らし
ざらざらした表面をわらわらしたものに変えると、また同じように
ツタを繋げる。

もう、少女一人の手はネックレスを作ることを止め、ただただ呆然とした顔でその制作されている自然のネックレスを見つめていた。

静かになる場に風が流れ、やがて最後のツタを絡み終えてしつかりと結び目を施すとそれをチコの首に掛けてやる。その豪華さはチコの作り上げたネックレスの数十倍の出来で、触り心地、色、形など全てにおいて一級品とも言える出来栄えであった。

「これもうつていいのー！」

目を輝かせて聞いてくるチコ、そのネックレスを掛けてもらつた瞬間に咲いたその笑顔は満開といった具合だ。

「ああ、それが俺のお返しだからな。チコの好きなようにしていいぜ」

「ありがとー、烽火大好きー！」

飛びつくように抱きつくチコ、その頭を二回ほど撫でてから烽火は再び二人の横に腰を下ろす。流れる風が心地よく頬撫でるのを感じながら、未だに動きを止めたままの一人に声を掛ける。

「作ろうか？」

『是非ー。』

ハモる一人に苦笑を漏らしながら、烽火は再びチコに作ったものと同じようなものの制作を開始する。恋に作ったのはネックレスだが桜とツタが別れている縞々模様のもので、八鹿に対して作ったも

のは王冠のような形をしている頭に載せる」との出来るタイプであった。

少女のような笑みでその出来上がった装飾品を受け取り、すぐに付けてみる一人、そこに広がる光景はとても不思議な力を使えるといわれる陰陽師の少女と、魔法使いの少女ではなく、ただの年頃の少女が映る花の世界の光景だった。

時間は流れ、時間は流れ続ける。

そう、どんな出来事に対しても時間は平等に流れる。悪いことも良きことも、嬉しいことも悲しいことも、時間は全てに平等である。

始まりもまた全てに平等だ。

小さな変化以上に大きな変化というのは時に気づかれにくいものである。それはどんな物事であったとしても同じことであり、人間にだって小さな変化を見逃さないに大きな変化を見逃すときもある。

四人はその変化に気づくことが無かった。

風が吹き荒れると花びらの数枚は千切れ、その風に乗つてどこかへと飛んでいくのを烽火だけが見送る。やがて花びらを見失い、空を見上げる。

空に浮かぶのは桜色の雲、日光を遮り地上への光は瞬く間にその姿を消した。

「おい、何の冗談だ？」

空は消えさり、変わりに現れるのは桜色の霧。1m先も見えないほどに濃い霧はその大きさを増して桜の原に覆いかぶさるように近づいてくる。飲み込まれないほうがいい、あれは危険なものだと何かが警告する。

生まれもつての感か、それとも何かの能力なのか、烽火はそれを即座に理解し、そして三人のほうへと顔を向ける。直ぐにこの場から逃げるべきだからだ

「烽火、置いてくぞ！」

突然の声に烽火の体が持ち上がる。いや、何かに引っ掛けた烽火の体が空に浮いていることに気がついたのは、己の体が何も掴んでいないのに空を飛んでいるからだ。急速にその大きさを増していく霧、それはやがて桜の原からも上がり始める。

まるで焚き火をしているかのように上がり始めるその霧は、瞬く間に桜の原を霧の海へと変え、まるで意思を持つかのように烽火たちめがけて流れてくる。それはまるで波のようにうねり、木々を飲み込み空すらも飲み込むほどに凶悪なものであった。

「なんなのよ、折角遊びに来たつて言つのに、ふざけんじゃないわよー。」

横を並走しながら飛び続ける恋、空を飛べる人間と呼ばれるだけありその動きは華麗なものであるが、今現在逃げているだけの状態なのにそんなアクロバティックに舞う必要性はどこにも無い。時々、お札を数枚投げ入れているが効果は無く、無駄と判断した頃にはス

ピードを上げて先を急ぎ始める。

その桜色の霧は速度もその規模も減少させること無く、逆に大きさは増し、進行速度も段々と速くなっている。その頃になれば、背中に映る景色が全て桜色一色に統一される。それは桜色の幻想とも呼べる光景、世界は桜色だけで埋め尽くされる。あらゆる色が織り成す世界を桜色の絵の具が塗り替えていく光景、それはもう世界への侵食そのものであった。

「なんか怖いね」

「飲み込まれたらどうなるかわからないぜ！」

いつもと変わらぬ口調で話す一人だが、その顔の下には言いやうのない異変を感じ取つていよいよつであつた。そのホウキに跨りなおす後ろの桜の波を睨みつけるように眺めながら、烽火は一人よくわからない苛立ちを感じていた。

その苛立ちの原因が何なのかはわからないが、世界が桜色に躊躇されていく光景が妙に癪に障る。今すぐにでもこの光景を消し去つてやりたいとさえ思えてきてしまうのはなぜなのか、それを烽火は理解することが出来ない。

ただ、あの桜色の霧に今飲み込まれるのは良いことではないとうことは理解できた。

ただただ桜色の霧から逃げ続ける、チコがいつも遊んでいるあの広場は八鹿の家に近いこともあり、四人は八鹿の家を目指して飛び続ける。

湖が見え始めると、直ぐにその桜の霧があらゆる方面から発生していたことが理解できた。

前方にも桜一色の世界が作られつつあり、それはまるで四人を包围しようとするようにその距離を縮め始める。

「なんだなんだ、えらい騒ぎじゃねえか！」

「八鹿、早く家に入るわよ！」

一気に急降下し、森へと降りる。木々の揺れる音を耳に聞きながら、木を搔き分けて家の広場までたどり着き、八鹿は容赦なく家の扉をぶち開ける。気が大きく軋むが、重圧に耐え切った扉は家中に入れといわんばかりに道を開く。

「よつしゃ、早く入れ！」

八鹿の言葉を聞き、すぐさま駆け込む三つの人影、それらが全て入り終わったのを確認して扉は閉まる。

そして、桜色の波は八鹿の家を瞬く間に飲み込んでいき、それは世界の全てを包み込んでいったのであった。

それらが日常と化すのに時間は掛からなかつたと言える。夏の迫る季節、本来とは違うぎらぎらと照らし始めるであろう太陽の光源も、早い時期で成長してしまつた蝉の鳴き声も、鳥の姿も見えないそんな夏が迫つてゐる。

しかし、人は慣れることに関しては他の追随を許さないほどの力を持つてゐるもので、しばらく見ていなかつた太陽が今見えていいのは毎日がこんな調子だからだと認識してこれ以上の推測をすることは無くなつた。

人々は変わらぬ生活を始め、やがて人ならざる者達も同じように生活を始めていった。これが元々の自然であったかのように、桜色の霧が立ち込めるのがこの世界の新しい常識となつたかのように、空は泣かない、雨は降るけど空が泣いているかどうかを確認する術は無い。雨が降つていらないときの空の顔もわからない。でもそれが日常である以上、誰も疑問になど思わない。

「今日もいい天氣だ」

「それならここ一週間ずつといい天氣だつたことになるだらうが」

「いやいや、人里では三日くらい前に雨が降つたよ」

外の天気を眺めながら会話をする一人、一人はこの店『提燈』の店主である靈山、そしてもう一人は烽火であった。この桜色の霧が世界に溢れるようになつてから約一週間以上が経過し、段々と近づ

いてくる夏の季節を温度というもので感じるしか方法が無い状態、『提燈』で売られている。大型のエアコンと呼ばれる長方形の形をした色々と面倒なものが入ったその箱は、なぜかあの黒い箱と同じようにバッテリーがあると動く代物でもあった。そして、最後の一冊というところで捨てるかどうか迷っていたところ、烽火がそれを使えるようにしたため、今この店の中はとてもなく快適な環境になっていた。

「それにしてもやることが無いとはこのことを言つのかもしないな。能力を使う氣にもなれない」

「その能力を使つても銃が作れないのが残念なんだが、弾くらいは作ってくれよ。自分で作るのかつたるいんだからよ」

靈山は人間ではない、人間と人ならざる者を足して二で割ったような存在である。この世界における不思議な出来事は対外が人ならざるものによつて起こされる。そして、現在この異様な日常を作り出しているのもおそらくは人ならざる者なのだろう。それほどまでに人ならざる者の能力は不思議なものなのだ。

実際、烽火の知り合いにはそう言つた能力を持つたものの方が多い、靈山は者を呼び寄せる力、恋は空間に干渉する力（つまり浮くこと）、八鹿は魔術式を読み取りそれを利用することの出来る力であつただろうか、そしてチコに至つても言霊を操る力を持っている。

そんな中で唯一の人間である烽火は、村人からの印象として不思議な存在として目を向けられている。そして、この一週間の間で危険も顧みず桜色の霧の中に出た最初の人間として無謀神のあだ名をつけられている。だから、街を歩くと無謀神と子供達に言われる。

「無謀神さまね～」

「それは言つたな、発生した時のと違つて危ない気配がしなかつたんだ。だから外に出たんだよ、わるいから」

「それが無謀つて呼ばれる理由であることに気づくべきだぞ。まあ、個人としては無謀神を崇拜してもいいだ。なにせ、この変な機械を使えるようにしてくれたのだからね」

指差す方向にあるのは壁にかけられた箱、風を送つているような音を発生させながら振動しているそれを、烽火は眺めて溜息を漏らす。

「はあ～、なんでこれの使い方とか俺わかるんだろう？」

「それが無謀神の力なのかもな、ひょっとすればおまえも人ならざる者の一員なのかもしれないな」

「そうかもしれねえな」

そんな不毛な会話を続ける店内に鈴の音が響く。それは誰かが来たことを告げる音、その音の発信源に目を向ける一人。

「いらっしゃいませ」

喫業スマイルの靈山、その近くでのんびりと棚を物色し始める烽火、そして来店したお姉。スマートな体格をしている女性、紫色のセミロングに合づ黒い服、そして何より、その服装に似合わないとつもなくやる気のなさそうな顔が一番印象深い。

そして何より動作が鈍すぎる。まるで人生に疲れたお父さんが、酒を飲むだけ飲んで次の日に「口酔い」、それで会社に行かなくちゃ行けないなんて嫌だねえ」とかいう雰囲気、そこそこのは本当に人生というもの軽く考えていくような女だった。

「すんません、ここに酒とかありますか。出来ればワインとかが良いんで」

自分で探す気が無いようですが、やばいほどにその顔は眠そうで、これなら機嫌の悪いハ鹿か恋をどうにかするほうが楽なのではなかと思えてくるほどだ。しかし、そこは店主営業スマイルのままだ。

「やつですね、どんなワインかにもよりますが

「赤い奴、すっげー赤い奴を4本くらい。それと米酒も欲しい、で
きれば6本」

赤い奴、ワインですっていい赤い奴っていうと、この店においてあるもの中ではレッドブリックドが一番と言った所が、と考え付いてすぐさま行動を開始する。

「お~い烽火

「なんだ~？」

「ワインの棚からR Bレッドブリックドを4、それと涼樓涼樓を6持つて来てくれ

「ちょっと待つてる~」

軽い返事を返して烽火はワインの棚に足を伸ばす。この店は変なものも多く売っているが、何気に食品関係のものも充実している。一体どこで手に入ってきたのかと思うほどの中ばかりで、それが彼の持つ能力の賜物であることは少しづつ理解できるわけである。

「RBってかなり度数高かつた気がするんだが、まあいいか」

小さな籠に4本のワイン、そして6本の米酒を入れて未だに本数がまったく減ることの無いこの棚を不思議そうに眺めてから再びレジ近くまで戻ってくる。

レジ前で待機していた眠そうな女は烽火を確認するなり、もつと顔を眠そうにする。その理由がどうであれ、微妙な心境になるのはあるが、ここは靈山の店であり、お世話になつて立場上何かを言つことは靈山に迷惑を掛けることにもなるので何もせずに籠を手渡す。

「いらっしゃりでよろしいでしょうか？」

品物片手に度数とその色のほうを説明すると、眠そうにしているその女は何度も頷きながら、「あのチビにはこれくらいがちょうどいいし、米酒のほうは申し分ないな」などと呟いていく。

ちなみに涼楼は度数70を越える化け物のような米酒である。人間が飲めるものといえば飲めるものかもしれないが、慣れてないものが飲めば急性アル中になつて倒れることになるだろう。

しかし、この女はそんなことを気にした様子も無く、その系10本の酒を全てポケットにしまっていたと思われる小さな鞄に入れた。

「お会計のほうが…………」

「おつりこりないからこれでお願い」

靈山が会計を告げる前に女の声、一人が顔を上げたそこにはすでに女の姿はなかった。なるばずの入り口のドアは開いていて、今さつきの女が霧の中に消えていく姿が見えた。

あの状況下で音を出さずに帰つていくとはなんともすごい女だなと思いつながらも、今しがた女が置いていったものを一人は確認した。そこには……

金の延べ棒が一つ置かれていた。しかも結構重たいものだ。

「烽火、これ貰つていいのかな？」

「常識的に考えればだが、確実に貰つてはいけないものだな」

「だな、次に『来店したとき、ちゃんととした代金を請求してお』『いつその間は、この店の商品のように棚に並べておくことにするか』

その言葉と共に靈山はその金の延べ棒を丁度いい置き場所に設置して、でかでかと最前列の棚に陳列した。

ちなみに値段表記は時価と書かれている。これで、あまり手を出さずやからもいないと考えたからだ。

「それにしても、見慣れない顔だつたな」

「ん、たしかに。あの雰囲気はこの人里に住んでいる奴じゃないだろうな。なにせあの眠そうな顔してたら、眠り神って呼ばれることになつてるだろ？」「

来客が去つて五分が経過した今、二人は最初の時と同じようにレジで話をしていた。内容は今さつき現れた女の話。

見慣れない服装もそうだが、あの感じから言つて人里に住んでいるような人間ではないことだけが理解できたこともあり、金の延べ棒のこともあるので少しばかり気になつたのであつた。それと烽火が無謀神と呼ばれていることを気にしているのはこの際伏せておいたほうがいい事実だ。

「なんで人里に住んでない奴だと思つたんだ？」

「それはな」

そこで一つ言葉を区切つてから、思いついたようにこいつ咳く。

「俺のこと無謀神って呼んでなかつたからだ」

桜色の霧が支配する森を歩く一人の女。

綺麗な顔立ち、紫色の髪、そして黒い服。それら全てを帳消しにするほどどの眠そうな顔。

今さつき買った酒の入ったバックを片手にのんびりと森の中を歩き続ける。周りへの警戒心など無い、ただただ思う氣ままに道を進

み続けていた。彼女はまるでそこが人なじめる者たちが闊歩する森であることを知らないかのように何も気にすることなく歩き続いている。

だから、それが後ろに迫つていても氣に留めることもなかつた。鋭利な爪をその服のようなものの下に隠し持つもの、それらは未だに気づいていないその女を見て口元を吊り上げる。

音を立てずに近づくことなどたやすいことであり、すぐに後5mくらいとことうとこ今まで接近できた。そもそも、こんな女に気づかれるようなへま等しない、なにせそういうことばかりをして生きてきたようなものだ、それに今まで踏んできた場数も違う。

この頃はこの霧の性で人間が出歩かなかつたこともあり、腹が多く空いていたこともあり、森の中を一人無謀に歩くその女を食べようと思ったのは必然的なことであった。恨みなど無い、ただ目の前に食材があるからとつて食べようとしているだけだ。空腹を抑えてここまで追つてきたが、もう我慢する必要も無い、叫びながら逃げ出したとしても誰も助けになど来ないのだ。

その者の殺気が覚醒する。静かな足取りで女の真後ろまで近づき、その服の下に忍ばせておいた刃物で一気にその腕を切り落とした。

鈍い音、何かが無理やり千切れるような音が響き、桜色の霧の中に赤い血しづきが新しい色を加えるかのように咲き乱れる。それは桜色の中で一際目立つほどの色、少しばかりの黒さを持つて咲き乱れるその水しづきは段々と池を作つていく。

「.....」

眠そうな田がその光景をのんびりと眺めていた。血しづきを上げて痙攣するのは頭を半分以上削がれた妖怪、未だに意識があるようで瞳孔がわずかながらに動いているし、削げ落ちてしまった自分の破片を手に握んでいる。しかし、それも少しの間だけで時間が経つたところでその体は力を失ったよう、「元のめりに倒れ、やがてピクリとも動かなくなつた。

静かに時間が流れる中、眠そうな田をした女はその鞄の横につけられている穴を確認して溜息を漏らした。

「こんな取り付けておくなつての。あー、君すまないね、安らかに眠つて頂戴」

横についているのは少しばかりの印を含んだ飾りつけ、そこからは濃い桜色の煙が少しばかり漏れ出していた。

動かなくなつた妖怪に別れを告げて女は再び歩き出した。

その場に残された妖怪の死体は、その後に歩いてきたほかの妖怪や妖精に食われ、その姿を残すことは無かつた。

世界は変わることなく桜色の状態を保っている。早いもので二週間以上が経過したことで、人々の中にあつた警戒心も薄れていき今は一週間前とほとんど変わらない生活が行われている。しかし視界の悪い森へと入りに行くものはいない、それでも人々はいつも通りの日常を思つたとおりに過ぎし続ける。

見えなくなつた太陽の光も、空の色も今は忘れ去られた過去のようになり、雨が降つても消えることの無いこの桜色の霧は、未だにその姿を漂わせ続けている。当初、大きな被害が出ると思われていたこの桜の霧は、今のところ視界を悪くするということ以外の支障を与えることなく存在していた。

そんな中、一人だけ森の中を歩く人影があつた。背中に背負つているのは無骨な鉄の塊で、銃と呼ばれる鉄と火薬で構成された弾丸と呼ばれるものを射出する武器である。長いそれは丁度その人影の身長半分ちょっと位の大きさである。

霧島烽火はそんなものを担いで森の中を歩いている。それはあることを耳に聞いたからである。

この頃、よく妖怪の死体があるから森に住む妖怪は有意義な生活を送れているとかいう話を聞いたのである。

別に森に住む妖怪達が有意義な生活を送っているからそれを今から壊しに行こうというわけではない、今現在ハ鹿が必要としている研究材料に妖怪の骨が必要なので、出来ればそれを拾う、もしくはその妖怪たちからもらえれば良いというわけである。ちなみに、烽火自身もその妖怪の骨を手に入れたら、人里の加工屋に売り例の箱を買うことにしている。何分、あの箱は提燈にしか売っていないこともあり結構な額がかかるのだ。

正直な理由を言えば、恋の怒りがそろそろ爆発しそうだからためめられたためといふことのほうが本音である。なにせ、代わりに購入して試すといってから早三週間以上が経過したわけである。自分に都合のいい通り進まないことがもつとも嫌いな彼女が遠まわしにそのことを烽火に告げていたことが今日のこの行動の原動力となつていたといえるだろう。

そしてそんな他力本願な考え方で森に入り、その妖怪の死体がたびたび目撃されると呼ばれる場所までは結構な時間が掛かるらしい、という情報だけを頼りに歩いてきた。そして、周りは桜色の霧で覆われた世界。

霧島烽火はそれほど方向音痴ではないが、この視界の中で闇雲に歩いていたこともあり見事に迷つっていた。

「……………」、「通つた」

田の前にある木には先ほどつけておいた印が描かれており、その下に5とこう数字があるということはこの印を見るのは六回目ということになる。一体どこをどうぐるぐる回つてているのかはわからないうが、この本格的に迷つてしまつたことに気づき始めた時には、本来の目的を第一目標として現在は森の中からの脱出を優先して歩き続けている。

そしてその結果がこれである。

同じ場所をぐるぐる回ること六回弱、出口の出の字も無い状態、妖精の姿も見ない、どこにいるのかもわからないという最悪の結果であった。

「どうすっかな～、さすがは迷いの森つて言われるだけはある

バルト森林帯の対面に存在している広大な森、つまり現在烽火が迷っているこの森の名前は迷いの森である。変わり映えしない景色

と、ほとんどが同じような獣道ばかりで写真で確認しても同じような光景にしか見えないほどで、田印になるような大きな木もそうそう無いためその名がつけられている。しかも、今は桜色の霧があるため視界も遮られることもあり、見える光景はほとんどが同じものになってしまいます。

それもあってこの迷いの森は人里の猟師でも一人以上で行くことが常識とされており、一人で入り込んだ烽火は迷つても仕方が無いというわけである。

溜息混じりの息を吐いた後に、胸ポケットから煙草を取り出す。煙草は提燈だけで売っている珍しいものの一つで、今は結構な種類が陳列されているが、リピーターが限りなく少ない。烽火はなぜか煙草を好む傾向があり、10個買いも普通にするくらいである。口に煙草を咥え、これまた提燈で売っているライターと呼ばれる着火器を使って火を付けて一服する。

「ふう～、どうすっかな」

一回目のどうすっかなを呴き、終わりの見えない森の光景に目を向け続ける。変わることの無い森の回廊は烽火を外の世界へと逃がしたくないかのようにその姿を変えることなく、しかし、全てを似せて見せ付けてくる。

もう戻らせない、このままこの場所で朽ちて行けと囁かれているような気にもなる。

少しばかり霧が晴れるのを待つという考えにも至ったが、この霧が晴れる可能性などありえないでの、歩いて森の出口を探すことにする。一步を踏み出し、数歩進んでから振り返ると、今さつきまで寄りかかっていた木はその姿を霧の中へと消していた。

そしてまた進み始める森の中、このまま迷つて終わると思われたこの徘徊は突然を終わりを迎えることになった。

「…………」

目の前にある大きな大木の真下、そこには一人タキシードに身を包んだ何者かがいた。特にやる気があるというわけではなさそうで、氣だるそうな動作で幹の周りを入念に調べているようで、時折「こんなもんでいいか」などと投げやりな言葉を口ずさんでいる。

やがてその人物は立ち上ると、すっと振り返り烽火と目を合わせる形となつた。

「………」
「………」

視線を交わしながらも、二人はお互の持つているものまるで吟味するように眺めあつていた。烽火は説明したように黒い鉄の塊、そしてタキシードに身を包んだ黒い人物の手には籠が握られ、その中には毒々しい色をしたキノコのようなものが所狭しと敷き詰められている。

人が食べても大丈夫なのか、いやそれ以前にあれを食べるような輩がいるというのか、そんな疑問を感じさせてくれるそのキノコたちを籠につめた人物は一步一歩烽火に向けて歩みを進め、やがてその顔を視認できる距離まで接近してきた。

紫色の髪とそのだるそうな顔、それは一週間前に提燈で酒を買つていった女そっくりの男であった。

「こんなところでキノコ狩りかい？」

烽火の言葉に男は、これですかという仕草で籠を指差す。やはり毒々しい色をしたキノコしか入っていないわけで、見ているだけでも気持ちが悪くなつてくる。

「そんなもんだね。それであんたは何してんだい、この頃は物騒なんだぜこの森の中」

まるで他人事のように語るこの男、その風貌もありかなり出来る奴であることは理解できる。それに烽火はこの男からあるにおいを嗅ぎ取っていた。

「そうだ、な。たしかにこの辺は物騒のようだ。なにせ血のにおいを染み付かせたタキシードを着て歩いているような奴がいるんだからな」

その言葉に男は一瞬きょとんとし、やがて目を線にした笑顔を浮かべる。それは笑っていない笑顔というものである。無表情に近いその笑顔は周りの温度を下げられる位の圧迫感があった。

「あ～、すまんね。ここら辺でウサギを殺したばかりだから血のにおいがまだ拭いきれてなかつたみたいだ」

「まったく、そんな血の氣の多い服なんか着ねえほうがいいぞ。人里に帰るときに面倒だしな」

「そんなの心配するよう無いんで、なにせ私は人里に住んでいる人間ではありませんから」

「ほお～、それは興味深い」

烽火の手が自然と腰に装着されたホルスターへと伸びる。烽火は感じ取っていた、どんな会話を交わそうと話がうまくいったとしてもこの男から何かしらの妨害を受けると、しかもそれは妨害とは呼べないものだ。

「直感的に、お前はこの桜霧の件に関わっている人間なんじゃないかと思えてならないんだが」

「直感的つてのもどうかと思うんだけどね~」

それは妨害などという生ぬるいものではない、それは相手の生存をその存在を完全に否定するために行う行動であり、あらゆる生物が持つ行動である。それは具現した暴力といふ名の行為。

「まあ、べつにかまわないか、殺しちゃつたらティナーの『テザートにでもすればいいわけだし』

そして、それが今まさに行われることは否定できない現実だ。

男の体がふわりと動く、それはただの籠から何かを取り出すだけの行為である、そうまるでキノコを一個取り出すかのようにして手を入れてそこからキノコを投げるだけのように見えてしまう動作。

しかし、それはまったく違うものであると理解したのはその手が籠から出た直後である。鋭い光の矢と表現するのが好ましいものが籠の中から飛び出す。その速度はおおよそ人間の投げるものの速度ではないが、それを烽火はやすやすとキャッチし、その存在を確認する。

「危ないものを投げるじゃねえか

「あつれ~、良く取れるな」

嬉しそうに眩く男の手にはもう籠の姿はない、その代わり手に光る物体が一本ずつ握られている。

変形機構を搭載しているのか、その光るものは所々の形が歪に絡まり、その場所から刃が出たり入ったり、絡まりが解けたりと色々な動きを見せる。

烽火の手が取ったのは鋭い輝きを放つ銀色の刃である。切れ味は見た目だけでも相当のものに見え、しかも両面とも使用できる型のもの、それはナイフと呼ばれる命を奪う狂氣であった。

「あ～、言つておくれ投げたのは何の変哲も無いナイフだから大丈夫」

「何が大丈夫なのは知らないが、ここでアンタを懲らしめて少しばかり話を聞かせてもらひつぞ」

ナイフを霧の中へと投げ込むとホルスターからハンドガンを抜き取り、安全装置を解除する。その目線の先にいるのは余裕綽々の男、その顔は無表情の笑顔を保つたまま動く気配を見せない。

「それじゃ、殺し合いますか」

その言葉と共にタキシードが先陣を切る。ふわりとした動きは一見何の変哲も無いただの行動に見えるがそれは幻影のようなもの、その手に握られたナイフの輝きはどうやっても消せないもので、烽火の胸めがけてその刃を振るう。

風を切り裂く音ともに響くのは爆音、銃弾と呼ばれるものが発射される際に響く銃声である。飛び出した弾はそのまま男へと向かっていながら、それは大きな音を立てて軌道を変え霧の中へと消えていき、同時に両足で思いつきり地面を踏んだ男が再びナイフを振るい、胸元をかすらせる程度の距離で烽火は身を反らして避けるが、次の瞬間その刃先からもう一本の刃が出現し胸を抉った。

着ていた特殊な素材を利用した服もその刃には効果が無いのか、その布すら抉り取つていき、最後に回し蹴りが脇腹に直撃する。息が止まるような衝撃を受けて、力のままに木へと叩き付けられる。かなり大きな音が森に響くが、誰かがやつてくるような気配はない。

痛んだ体に鞭を打つようにしてすぐさま立ち上ると男はきよんとした顔で起き上がった烽火を眺めていた。

「驚いた、今のでほとんどの奴は死ぬんだけどな。あんた運がいいね」

「あ、ありがとさん、そのナイフ結構痛いな」

痛み始める胸の傷を押さえる。あまり深く抉られとはいないので血液の流出は遅いが、それは新しい問題を烽火に与える。動くたびに傷口が開き痛みが増倍してしまったのだ。

「ああ、特注品だからね。よく殺しやすく出来てんだよ。まあ、今まで心臓を抉り取れなかつたのが残念だけだな」

氣だるそうな顔で呟き、再びナイフを構える男の手には特殊なナイフが一本と小型の投擲用と思われるナイフが四本指に挟まるようにして握られている。それらが烽火のために用意されたものであることはもう話さなくともわかることだ。

烽火自身も背中に備えているコンバットナイフと呼ばれる部類のナイフを取り出し構える。

「面白い！」

その言葉と共に男の手から放たれる四本のナイフ、綺麗な軌道を描いて飛んでいくそれを烽火は一つ残らず撃ち落し、両足に力を入れナイフ片手に接近戦を仕掛ける。

そして男はそれを待っていたと言わんばかりに特殊ナイフをもう一本手に取り一刀流でその攻撃を受け流し刃を振るい、かすつたと思えた瞬間には隠し刃が出現させ、その掠つた場所めがけてもう一度刃を振るわせる。

ナイフ一本でそれを受けきりながら、烽火の傷は徐々に増えしていく。それは目に見えて生々しい傷ばかりである。

「す」「いな、ナイフ一本で受け続けるなんてよ」

「つるさい、お前のナイフは構造がす」「いと思つぞ」

「褒めるな、殺すだけじゃ飽き足らなくなつちまうぞ」

その言葉と共に男が両足に力を込めて、一瞬だけ力を入れて烽火のナイフを弾き飛ばさん勢いでナイフを振るつた。全ての刃を隠すことなく展開させたそれはまるで扇子のように広がり、ナイフを飛ばした直後にその手をハツ裂きにすることを目的にしているようにさえ見える。

大きな甲高い音が響いたと同時にナイフが空へと飛び。そして烽火の指が何本か落ち、血が噴出し始める。

「これで終わり〜」

その言葉と共に男がもう一本のナイフを思いつき振り体勢に入り、烽火は吹き飛んだ己の指とその男の攻撃を避けようとするが、痛みに体が言うことを聞かずそのまま立つたままで止まる。

一瞬の閃光が森に走る。

それが男のナイフによる物ではなく高速で飛来した御札の輝きであつた。突然の乱入人物に男はすぐさま手に持ったナイフで真上から降ってきた御札全てを弾き落としながら後ろへと下がる。

何事かと思いながら顔を上げたその先には、呆れた顔のまま浮遊する崩咲恋の姿があつたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7192f/>

夢想月下～桜霧空～

2010年10月12日05時34分発行